

ラウンドテーブル

「少女マンガとネオ・ヴィクトリアニズム」 —『バジル氏の優雅な生活』から『黒執事』まで—

川端有子×村上リコ

はじめに

まずはこの企画において「ラウンドテーブル」という形式を取りたかった理由を述べておきたい。常日頃、シンポジウムという形式が、同一テーマをめぐってであっても、パネラー個々の研究発表に終始し、フロアからの質問時間がほとんどなくなってしまうこと、パネラー同士のディスカッションが深まる時間もないこと、フロアとパネラーの距離があまりに遠すぎて、気楽に質問や討論ができないことが不満であった。そこで、発表者とフロアが同一平面上に座し、発表者のトークの間にも、質問や疑問をさしはさんで、発表者とフロアが一体のセッションを行うことが可能な、ラウンドテーブルつまりだれかが一番偉いのではなく、同等の立場で議論する—という、まさにアーサー王の円卓会議の名を借りたこの形で、しかも学会員以外にもヴィクトリア文化に興味のある若い人々を取りこんでみようと考えたわけである。

もともと今回は「ラウンドテーブル」と通常のシンポジウムを一つずつ同時進行させるプログラムになったため、(通常ならラウンドテーブルは3～4本同時進行にして参加者を少数に絞る必要がある)形としては提題者のわれわれが前に座り、フロアは教室内に前を向いて座するという事になった。しかし、通常のシンポジウムとは一線を画するため、われわれは、一つのテーマについてばらばらに発表し、あとで質問を受け付ける方法を避け、二人で一つの発表を行い、補足、訂正、反論しあいながら流れを作り、その中で、話の切れ目ごとにフロアにマイクを回し、自由に発言

をしてもらうような形式を取った。そもそも村上・川端は、その他数名のグループで、ここ2年ほど、「少女マンガとヴィクトリア朝」というテーマで月例研究会を行ってきていたので、共通認識があり、問題点も共有していたので、このような形がとれたとも言える。だが、サブカルチャーの時代考証、ヴィクトリア朝の使用人文化に詳しいライターという立場の村上と、児童文学研究からヴィクトリア朝に注目し、同時に少女マンガについては一ファンにすぎない英文学研究者の川端では、守備範囲や知識の幅にずれがあり、視点にも微妙な差がある。それゆえ、二人が補い合うことによって、新しい研究方法が模索され、また視野が広がり、研究者としての幅も広がれば幸いであるし、さまざまな領域の人々に気楽に発言する場を提供したかったというのも、この企画の目的であった。

二人の発表には川端が作成し、村上がチェックを入れたパワーポイントを使用し、かわるがわるに話をして、しかるべき時にフロアからの発言を聞き、答え、議論をしてまたパワーポイントに戻る、というような流れをとった。

1・『黒執事』の現在

川端：現在、雑誌「G ファンタジー」に連載中の枢やな作『黒執事』は、少年誌に連載しているにもかかわらず、中高大学生の女子のあいだで絶大な人気を誇っており、本発表を行っている時点ですでに単行本 19 巻が出版されており、各国語に翻訳されて、とりわけフランスで非常な人気を博している。

この物語は、すでにアルバート公亡きあとのヴィクトリア朝を舞台として、悪魔と契約を取り交わし、一家を惨殺された復讐を誓った、ファントムハイツ伯爵家の跡継ぎの少年シエルと、彼の魂と引き換えに、執事の姿で献身的に彼に仕える悪魔セバスチャン・ミカエリスが活躍する物語である。マンガの人気で CD ドラマ化、アニメ化、ミュージカル化され、昨年の冬には水嶋ヒロ、剛力彩芽主演で実写版映画も制作され、まさにマルチメディア化されたといえる。(ただし、この実写映画はあまりにもお粗末

で、ロケも北九州や山口など国内でしか行っておらず、筋も陳腐なものにされてしまい、原作ファンとしては、なかったことにしてほしい黒歴史である。)

『黒執事』でくりかえされるセバスチャンの決め台詞、「あくまで／悪魔で執事ですから」というものは、作者が編集担当者と雑談をしていた時に思いついたダジャレであったというが、それが執事たる者の謙譲精神と同時に、彼の正体をほめめかす意味ありげな常套句になり、これだけの物語を生み出したのであるから、素晴らしい。残念ながら、これだけは翻訳不可能で、日本人読者だけが楽しめる特権である。

内容は、大きく分けて①切り裂きジャック編、②インドの王子様とカーリーコンテスト編、③フリークサーカス編、④密室殺人事件とコナン・ドイル編、⑤ゾンビーの謎と豪華客船沈没事件編、⑥パブリック・スクール編、⑦現在進行形のドイツの謎の森編、と続いてゆき、その間に回想シーンとしてシエルが悪魔と契約したそもそもの事情や、ファントムハイヴ家と王室とのつながり、屋敷に雇われている奇妙な使用人たちのキャラクターが明らかになってゆく。

大衆文化において、ヴィクトリア朝と言えば必ず脳裏に浮かぶ「切り裂きジャック」「ホームズ」「エレファントマン」「降霊会」「パブリック・スクール」「植民地インド」といった要素は網羅されているうえに、巻を追うごとにだんだんと時代考証が詳しくなり、ヴィクトリア女王の側近の名前や、クリケットのゲームのルール、パブリック・スクールの制度など細部の正確さが際立つようになってきている。(なかでも、パブリック・スクールの資料を読み漁るうちに、作者は＜ハリー・ポッター＞シリーズが、いかに十九世紀の学校物語を正確に踏襲したものかに気付いたと述べているのは興味深い。)

燕尾服の裾を翻して跳躍し、指の間にナイフとフォークをはさんだものを武器として使用するセバスチャンの耽美的な姿や、悪魔と人間の魂をはりあう死神たちの争い—死神は公務員であるということになっている—の笑いを誘う場面、少女趣味—辺倒のシエルのフィアンセ、リジーが実は男勝りの剣者であったなど、少年誌的なアクション中心のストーリーでありながら、女性が読んでも不快感を覚えない適度なジョークを交え、女性

の身体的露出も抑えられているところが、少年向けマンガでありながら、女性ファンを惹きつけた理由であろうと考えられる。

村上:わたし(村上リコ)はアニメ『黒執事』に「考証協力」というクレジットで参加している。2008年と2010年の最初の2作に呼んでいた。原作マンガにはこのときのアニメ制作が縁で、連載の途中から、「パブリック・スクール編」(2012)のころから「アドバイザー」として協力している。たとえばアニメでは、脚本会議に参加して、原作にはない追加のストーリーを作るための参考資料を紹介し、できた脚本をチェックして用語の問題などを指摘した。原作に関しては、ネーム(下描きの前段階)を確認し、質問があればその都度応答するという形をとっている。『黒執事』の原作マンガは、1巻でひとまず話がまとまっており、まず短期集中連載として始め、人気が出たら長く続けるというパターンで始まったらしいことがうかがえる。しかし1巻の段階でも、あとで使うための伏線、キャラクターが随所にちりばめてあり、先の展開は考えられている。とはいえ最初のころは、テレビや携帯電話といった現代のアイテムが存在するなど、当初は十九世紀の英国という舞台の要素を強く前面に出そうとはしていない。基本的に「パラレルワールド」の英国である。

キャラクターデザイン、動画、背景美術、演出、音楽、声優と、多人数の専門家によって分業で作られるアニメの制作過程に触れると、さまざまな刺激が原作者にもフィードバックされる。また、そうでなくとも、連載を続けるほど調べた資料は血肉になって蓄積していく。時代ものマンガは連載が続いていくと、時代性を意識した描写が濃くなっていく、ということの理由が、アニメとマンガの周辺スタッフとして制作過程を観察したことで理解できた。後述の森薫『エマ』がアニメになり(2005、2007)、時代考証スタッフとして初めてアニメ制作にかかわったときにもこれは同様だった。

フロア:フロアから、日本のマンガでは執事キャラクターに、『黒執事』と同じく「セバスチャン」という名前が多いのはどこからきているのか?という問題提起があった。「おそらくアニメ『アルプスの少女ハイジ』

(1974)の男性使用人の名前が発端ではないか」と思われる。「日本だけでなく、アメリカでもディズニーのアニメ映画『リトル・マーメイド』(1989)の蟹のお目付け役がセバスチャンである」という指摘もあった。

また『黒執事』は少年シエルが主人公として扱われることが多いが、主人公はあくまで悪魔のセバスチャンであることを制作側が公言しており、ファンのみならず一般でも周知されている、それは指摘しておきたい、という発言もあった。

2・少女マンガの歴史

川端:さて、ここで少女マンガとヴィクトリア朝の関係を述べるために、そもそも少女マンガがどのような物語的流れを引き継ぎ、絵画的影響を受けてきたかに触れておきたい。時代は明治にさかのぼる。

女学生ブームに沸いた明治期『少女世界』『少女の友』『少女倶楽部』などの雑誌が相次いで発行されていた。これらの雑誌には、いわゆる「少女小説」が連載されており、その書き手としては、吉屋信子 松田瓊子 横山美智子 西条八十、水谷まさを、川端康成(中里恒子)などが名を連ねる。小説の内容は、男女の恋愛ものはご法度であったから、姉妹の愛憎、生き別れた母子の再会、女学校のシスターフッド(「エス」と呼ばれた)などを扱い、感傷的でロマンチックなものが多くを占めた。のちに、これらの雑誌は「ひまわり」「ジュニアそれいゆ」などに引き継がれ、現在、この流れはすっかり「少女マンガ誌」へと変貌している。

こうした雑誌に挿絵を寄せていたのが、いわゆる抒情画の描き手たちであり、竹久夢二、高島華宵、中原淳一、内藤ルネ、高橋真琴、藤田ミラノらが活躍した(このうち、女性画家は藤田のみ)。このなかでも、高橋真琴などは今も現役であるが、星のきらめく瞳、カールした髪、花を背景にして微笑むドレスの少女、という少女マンガのテンプレートを作った画家と言える。

初期の少女マンガ家にとって、上記のような少女小説に加え、翻訳児童文学、ハリウッド映画も大きな影響の源泉であった。『若草物語』小公

女『赤毛のアン』『不思議の国のアリス』などの片鱗は、少女マンガの細部のいたるところに見出すことができる。いまだインターネットなどがなく、海外の本を知ろうにも、取り寄せようにも、ほとんど大手書店に頼るしかなかった時代、銀座のイエナ書店は、小さいながらも美術関係の洋書をそろえている稀有な書店で、残念ながらもうなくなってしまったが、当時の少女マンガ家には、資料を求めて足しげく通ったという思い出を語る人が多い。そこにあった絵画は、日本の抒情画とはまた違った源泉であり、アールヌーボー風の長い髪と花が絡むミュシャのポスター、ラファエル前派の豊かな髪をもつファム・ファタールたちであった。内田善美の繊細な絵柄に、山岸涼子の流麗な線画に、わたしもはっきりとラファエル前派の絵を想起していたが、2014年2月号の『芸術新潮』少女マンガは「ラファエル前派の夢を見るか」という記事において、それは証明されている。

1970～80年代は、少女マンガ雑誌の全盛期と言っていいだろう。読者層の幅も広がり、様々なニーズに応えるために、出版社ごと、雑誌ごとの特色が現れたのもこの頃である。「マーガレット」「フレンド」「りぼん」「なかよし」「花とゆめ」「ぶ〜け」「プリンセス」「ボニータ」等々、誰もがお気に入り雑誌を持っていた。

ハリウッド映画や翻訳ものの影響を受け、外国ものが多かった前世代に比較して、日常的な少女の世界を描くことが多くなり、身近な恋愛物語が中心となるが、そのほかにも歴史もの、スポーツもの、学園ものなど、テーマの拡がりも見られた。よりおとなの女性向けのレディース・コミック、ボーイズ・ラブ(BL と呼ばれる)を扱った高い年齢層をターゲットにしたものもあらわれる。

80年代からは、いわゆるクロス・ジェンダー現象も起こってきて、少年誌を読む女性「ジャンプ女子」、少女マンガを愛読する男性「白泉男子」などもカミングアウトするようになってきた。しかし、その後、不況やIT環境の拡大から雑誌離れが進行し、2000年代からの読者は、雑誌ではなく単行本を購入するようになり、次々に有名な雑誌がなくなっていく。そしてマンガは、みんなが読んでいっているものというよりは、「オタク」の読み物とみなされるようになりつつある。

このようなざっと示した流れの中でも、外国文化を取り入れ、少女マンガの文学性を一気に高めたのが、有名な萩尾望都、竹宮恵子、大島弓子などの「花の24年組」である。例えば、萩尾望都は英・独文学に詳しく、『ポーの一族』(1972 - 6)、『トーマの心臓』(1974)で、今まで文学でしか表現できなかった世界を表わし、とりわけ『ポーの一族』では、イギリスを舞台に、18世紀から20世紀まで生き続ける不死の吸血鬼一族の物語を描き、イギリスの文化や歴史、風物を正確に写しだした。また、より低年齢層を狙ったいがらしゆみこと水木杏子の『キャンディ♡キャンディ』(1975-79)は、アメリカの19世紀から20世紀初頭の少女小説『八人のいとこ』、『あしながおじさん』等を取り込んだ元気な孤児物語である。これらの作品に、ヴィクトリア朝は軽く触れられる程度に出てくるが、まだほんの背景というにすぎなかった。

3. ヴィクトリア・マンガの始まりと展開

本格的にヴィクトリア朝を描き、意識的にその特徴を物語に反映させた少女マンガの最も早い例は、我々が調べた限りは、1980年から87年にかけて、「花とゆめ」に連載された坂田靖子の『バジル氏の優雅な生活』に求められる。有閑貴族のバジル氏の周囲で起こる様々なエピソードが連なる物語だが、あきらかにバジル氏のモデルはオスカー・ワイルド、もしくはドリアン・グレイである。かれの友人の画家やその女装モデル、警視総監の息子と恋に落ちたバブの女給、平気でひとりエジプトを旅行するレディー・トラベラーなど、上流階級から下層階級までのキャラクターが活躍し、階級差結婚や何もかもを知り尽くして黙する執事など、この後につづくヴィクトリア朝ものを予想させる内容である。

1998年の『レディー・ヴィクトリアン』から『コルセットに翼』『ガーフレット寮の羊たち』(連載中)と、ヴィクトリア朝ものを描き続けているマンガ家に、もとなおこがいる。読者層がやや低年齢である「プリンセス」掲載であるためか、読者にヴィクトリア朝文化背景を詳しく教えるような立ち位置で、ガヴァネス志望の元気な少女を中心に、女装の麗人伯爵

令嬢が、実はコックニーのスリーデッカー・ノヴェルの作者であるという奇抜なアイディアの『レディー・ヴィクトリアン』『小公女』の影響を受けたとおぼしき抑圧的な女学校の生徒たちが、静かに作戦を練って反乱を起こす『コルセットに翼』ここに、ワイト島出身の主人公の出生の秘密の物語が絡み、まるでジュリア・マーガレット・キャメロンのような写真を撮り続けていた彼女の父の謎(しかも彼はインド帰り)が解き明かされる。『ガーフレット寮の羊たち』は、レディー・ヴィクトリアンの兄のパブリック・スクール時代の物語である。

フロアより、同作品を愛読する研究者から『レディー・ヴィクトリアン』のヒーローのキャラクターはヴィクトリア時代の女性雑誌編集長であり、木版画の挿絵制作過程などを非常によく取材して描いているので、このあたりもヴィクトリア朝研究者にとっては勉強になるのではないかという指摘もあった。

川端:ヴィクトリアン・ブームに火をつけた作品はやっぱりなんといっても森薫の『エマ』であったろう。2002年から2006年まで、青年誌である「コミックビーム」に連載され、男女双方から支持を受けて、何か国語にも翻訳されて世界的に愛読された、メガネのメイドのエマの階級差恋愛とその波乱万丈の行方をおった物語である。なんといっても初めて使用人の視点から見た物語であったこと、アシスタントも使わず、膨大な資料を用いて詳細に描いたリアルな背景、ドレスや下着、使用人の階級と仕事の詳しさなど、今までのマンガとは一線を画する精密さで、ヴィクトリア朝文化のお勉強の役に立つとさえいえる作品であった。この作品も、アニメ化、ノベライズなどされている。

一方、坂田靖子と同じ金沢出身の波津彬子は「うるわしの英国シリーズ」という作品を2001年から2007年にかけて出しており、この中のストーリーにはワイルドの「カンタヴィルの幽霊」「ウィンダムミア夫人の扇」の翻案も見られる。ヴィクトリア朝のオリエンタリズムを日本人が描くというちょっと倒錯した関係であるが、とにかくこの人のカラー画の美しさは群を抜いている。

フロアより、波津彬子の実姉であったマンガ家の花郁悠紀子が坂田靖子 と仲の良い友人同士だったので、波津は坂田に強い影響を受けているという指摘があった。

川端:同じころ始まりながら、全く異なる世界を演出しているのが、船戸明里が描き、いまだ完結していない『アンダー・ザ・ローズ』である。家庭教師にしては美しすぎる主人公がこんどようやく得た職場は子だくさんの伯爵家であったが、屋敷に閉じこもる病んだ奥方、しだいに明らかになるヴィクトリア朝貴族の闇の世界が、まっすぐすぎるヒロインを叩きのめす、ダークな内容である。もっとも船戸明里は背景にこだわるタイプの画家ではないので、書き込みはさほど細かくはない。

村上:船戸作品は衣装、下着、ヘアスタイル、小物など、人物に関する風俗描写が非常に繊細である一方、建物やインテリア、飲食物などについてはあっさりしている。同じ国の近い時代を扱っていても、何に力を注いで描くかは作家によって異なる。それは作品の中で何を重視しているかということでもあるが、現代から見たヴィクトリア時代のどんな点にもっとも魅力を感じているかの違いでもあるだろう。同じ時代の同じ資料から、作家たちはそれぞれに描きたいものを拾い出してまったく違う世界を作り出す。

川端:「ダークなヴィクトリア朝」を描く 90年代スタートの作品として由貴香織里の『伯爵カイン』シリーズがある(1991～2003)。『不思議の国のアリス』や「マザーグース」からの引用、「切り裂きジャック」モチーフなどを扱った、ホラー・オカルト色の強いダーク・ファンタジー。執事と主人の関係も描いていることから、『黒執事』が始まったころは、『伯爵カイン』とモチーフが重なる点が多い、先行作品からヒントを得たのではとの声もあった。しかし『カイン』の舞台がヴィクトリア朝である必然性は薄く、たんに外国で、昔であればよかったというふしはある。「アリス」「マザーグース」「切り裂きジャック」はヴィクトリアン・マン

ガに共通する定番の要素なのである。

村上:ちなみにヴィクトリア朝の話ではないものの、有能な執事と頼りない坊ちゃんの組み合わせを描いた作品の原型のひとつとしてP.G. ウッドハウスの<ジーヴス>ものがある(1915 ～)。勝田文により日本で少女マンガ化もされている。カズオ・イシグロの小説『日の名残り』(1989) およびその映画化(1993)は、発表時より日本でよく知られていたが、イシグロがモデルとして念頭に置いていたジーヴスの小説は長らくまとまった翻訳がなく、日本でたて続けに刊行され始めたのが2005年、その翻訳を原作としたマンガ化は2008年だった。ちょうどこの00年代半ばから後半にかけて、『黒執事』と同時期に「執事もの」の少女マンガやドラマが盛んに作られ、「執事ブーム」を形成していたが、これら「日本風の執事」が『日の名残り』などを通して間接的な影響を受けたといえるジーヴスものに、日本の読者があとから触れることになったというのは面白い現象である。

また、ヴィクトリア朝を舞台としたマンガが流行った背景には、1980年代の「ヘリテージ映画」のブームがあったこともあげられる。『炎のランナー』(1981)を嚆矢として『眺めのいい部屋』(1986)『モーリス』(1987)など、歴史、小説、シェイクスピアの演劇などに題材をとって、英国らしい田園風景や風俗・衣装を美しく懐古的に描いた作品群である。それまでも西洋文化を扱った外国映画やテレビドラマは少女マンガ家たちの表現に強い影響を与えてきたが、とりわけ90年代以降のヴィクトリア朝少女マンガにおける「英国志向」には、これらのヘリテージ映画からの影響が強いと思われる。特に顕著なのは波津彬子の描く英国シリーズ。また『エマ』に出てくる執事スティーブンスは名前からして『日の名残り』の主人公である。

川端:ここまで主に女性向けのマンガを論じてきたが、少年マンガにもヴィクトリア朝は描かれている。大部にわたる荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』(1987～)も、最初はディケンズばりのヴィクトリア朝ロンドンから始まり、「切り裂きジャック」も登場する。その「切り裂きジャック

ク」と並んでペニードレッドフルをにぎわした「バネ足ジャック」の正体を暴いた藤田和日郎の『黒博物館—スプリングルド』が 2007 年に出ている。少女ものとの違いは、暴力シーンに血が飛び散ったり、乱暴された少女の服が破れて胸があらわになったりするところで、女性が読んであまり気持ちのいいシーンではない。

村上: ヴィクトリア時代は、少女マンガにおいては美しく、華やかで、抑制的な世界として描かれることが多いようだが、少年・青年マンガ界では、児童虐待、階級差別、性差別、性犯罪、猟奇殺人など「歴史の暗部」を強調して扇情的に描くことが多い。同じ時代の何を拡大して見せるかは、作者の関心のほか、想定する読者によっても変わる。

『黒執事』掲載誌の「G ファンタジー」は、「少年ガンガン」の増刊として 1993 年に創刊され、「女性向けの少年マンガ誌」として始まった。作品のファンダムは圧倒的に女性が優勢だが、カテゴリーとしては少年マンガである。『伯爵カイン』は純然たる少女マンガ誌の「花とゆめ(別冊)」掲載。この 2 作品はともに「切り裂きジャック」を扱っている。少年マンガ文化の流れの延長上にある女性向けヴィクトリア朝マンガであるといえるだろう。

4・まとめ

川端: ここまで長々と、ヴィクトリア朝を舞台とするマンガを紹介してきたが、なぜヴィクトリア朝なのか、という点を分析してまとめてみたい。

- ① 少女マンガの必須アイテムであるひらひらのドレスや美しい装飾が描ける
- ② イギリスとは、普通の女の子が王子様と結婚できる国であり、かつファンタジーを生む距離感がある
- ③ 恋愛に、「階級差」という社会に負わされた障害が立ちはだかる
- ④ 女の子を束縛するヴィクトリア朝社会は、換喩的に現代の日本の状況も示す

これらの少女マンガ作品は、ネオ・ヴィクトリアニズムとは少し違う。ネオ・ヴィクトリアニズム小説の読者は、間テクスト性を意識して読んでいるはずである。しかし、少女マンガの読者は、歴史的正確さを求めているわけではないし、意識もしていない。むしろ、作者のみが一生懸命、調査、検証して描いているのである。読者はただ、詳細なマナーや衣装のコード、異国の昔の人々の生活に適度な距離感と憧れを持って読み、ヴィクトリア朝の設定は、その憧れという「ファンタジー」に、確固とした枠組みを与えているのみなのである。そして、作者のソースは、必ずしも直接的な資料によるものではなく、ジェイムズ・アイヴォリーのヘリテージ映画や、ティム・バートンの映画であったり、あるいは世界名作劇場アニメ、ジブリアニメ、ディズニーアニメであったりする。こうして、いったん現代を経由してのヴィクトリアニズムを再度、世界へ発信しているのが、こうした作品であり、ジャパ・ヴィクトリアニズムとでも名付けてみたい気がする。

フロアより、少女マンガの起源として西洋的な世界を描いたということでは手塚治虫の『リボンの騎士』と池田理代子『ベルサイユのばら』は外せないのではという意見があった。また、ヴィクトリア朝少女マンガは、描き手はすごく勉強するが、描きたい華やかなところだけを表現し、読者も正確な時代性などは求めないという点で、宝塚歌劇の世界に通じるところがあるのではないかと、「絵で見る宝塚」と言えるのではないかと指摘もなされた。

同じくフロアより、紹介されているマンガは上、中流階級を題材にした作品が多いのではないかと、労働者階級の視点で描いた作品は少ないのかという指摘（メイドが主人公の『エマ』やディケンズ作品のイメージを取り入れた作品はある）。また、子どもの世界がもっと取り上げられてもよいのではという意見があった。19世紀に描かれた、風刺漫画ではないストーリーマンガも存在するのでそちらも検討していくとよいのではという話も出た。

川端：少女マンガというメディアである限り、主人公がヴィクトリア朝にもてはやされた「美しい子ども」であるわけにはいかないという事情があるという点で、子どもの世界は取り上げられにくい。19世紀に描かれたストーリーマンガと直接の接点はないため、今回はそちらには手を触れなかったが、今後の課題にしたい。

川端『黒執事』は現在42か国語に翻訳され、国内で第54回小学館漫画賞少年マンガ部門にノミネートされたのみか、2010・11年にはフランスで、ジャパン・エキスポ・アワードを、最優秀少年マンガ部門で連続受賞、またドイツのアニメジックでも2011年にベスト・インターナショナル・マンガ賞を獲得している。

『黒執事』と『エマ』の違いは、『エマ』が極力ヴィクトリア朝のメイドの視線に終始し、時代性にこだわったのに対し、『黒執事』はヴィクトリア朝の出来事に、現代の時事性をもオーヴァーラップさせているところにあるだろう。最近刊のドイツの森の魔女の物語には、なんと毒ガスのサリンが登場している。いまだつづく現代のファウスト物語の着地点が気になるところである。

『黒執事』のヒットは、スチームパンクの作品にも相互影響を与えている。たとえば、アメリカの作家ゲイル・キャリガーの〈英国パラソル奇譚〉、〈空中学園シリーズ〉などにも共通のモチーフが見られるし、キャリガーの公式HPには読者によるファンアートとして「黒執事」の奇妙な模倣と見える「怪執事」なる画像が載っている。キャリガーの作品が続々翻訳になったのも、ヴィクトリアン・スチームパンクの受け皿となる黒執事読者の存在を意識したものであろうし、また逆に、〈英国パラソル奇譚〉は、MANGA化され(アメコミではなく)、その絵柄や表紙のデザインに明らかかな『黒執事』の影響が見えるのも、興味深いクロスオーバー現象である。

『アレクシア女史、倫敦で吸血鬼と戦う』という邦題にならうならば、「ジャポ・ヴィクトリアニズム、アメ・ヴィクトリアニズム(スチームパンク)とマンガで出会う」というところか。今後の超ジャンル性、超時代性、超国境性が作り出す新しい可能性が楽しみなトポスといえよう。

